

京都芸大にいた頃いくら留学を勧められてもその必要性を感じなかった私の考えを変えたのは、PMFで受けたカルチャーショックでした。それまで日本人と日本語でのコミュニケーションしか取ったことのなかった私にとって、世界各国から集まったアカデミー生達の中で過ごした1か月は文字通り人生の転機点となりました。その後すぐ英語を集中的に学び、英国ロンドンのギルドホール音楽院に留学する準備を始めました。数人の方々からイブラ・ニーマン先生という素晴らしい先生がおられると伺って、その方と連絡を取りたいと思いました。確かもう10月頃でした。音楽院から取り寄せた資料から11月11日にOpenDayと言って学校を1日見学出来る日があることがわかりました。あと1か月しかなかったこともあり、とにかく急いでニーマン先生に手紙を書くことにしました。これが初めて書く英語の手紙だったので、至る所間違いだらけでした。しかもあまりにも急いだ私は封筒に「速達」と書いたつもりで「緊急」と書いていた上に赤線まで引いて出してしまいました。普通ならここで終わってしまってもおかしくないのですが、ニーマン先生はなんとそれも「速達」で、お返事を下さったのです。この時直観的に、私のあの間違いだらけの手紙に速達でお返事を下さるような誠実な先生に就いて学ぶことが出来たらどんなに素晴らしいだろうと思ひ、一人でロンドンに立ってOpenDayにニーマン先生を訪ねてギルドホール音楽院へ行きました。レッスン室の戸を開けると、割と小柄で温厚な感じの先生がマスタークラスを行っているところでした。

イブラ・ニーマン先生は20世紀を代表する名ヴァイオリン教師として世界的に有名な方で、数々の偉大なヴァイオリニストを輩出されました。多数の国際コンクールの審査員としても知られ、ギルドホール音楽院の弦楽学部の学部長なども務めておられました。小さい頃から音楽的英才教育を受けたことのなかった私にとってニーマン先生に就いて学ぶことが出来たことはPMF参加に次ぐ転機点でした。

学校でのレッスンは常に四人一組のマスタークラスで、一人が弾いている間残りの3人はそのレッスンを聴くという仕組みになっていました。各自カセットテープを持参し、レッスンは毎回先生が録音されました。テープに入っている一言一言をノートに書き留めたものが厚さ5cmくらいのファイルになって残っています。どのレッスンでもニーマン先生が生徒を叱りつけたり怒って怒鳴ったり、バカにしたり皮肉を言ったりするのを私は一度も聞いたことがありません。常にあの低くて良く響く声でゆっくりとしっかりした口調で、優しく分かりやすく丁寧に指導しておられました。極めて忍耐強く驚くほどアップダウンの無い人で、まるで医者のように生徒一人一人にその時何を教えるのが一番大切な優先順位を本能的に的確に選んで指導される方でした。時間に正確で6か国語を話し、非常に広い知識を持っておられました。曲や作曲家の歴史や背景について話して下さったり、私の全く

分からなかった西洋音楽の音楽言語のようなものも少しづつ説明して下さいました。こうして英語が少しづつ分かるようになっていくように音楽言語もニーマン先生の下で少しづつ分かるようになっていきました。実はヴァイオリンの奏法を本格的に教えて下さったのもニーマン先生が初めてでした。学校でのレッスンは必ず素晴らしいピアニストの伴奏があり、慣れない私にとってこのピアノと一緒に弾くということも大変貴重な経験でした。

ニーマン先生の音楽に対する姿勢で最も尊敬するのは誠実さです。その人柄と同じように、音楽に対してもレッスンに対しても極めて誠実な方でした。音楽と音楽を教えることを心から愛し、それだけに人生の全てを注ぎ込んでおられました。いつもおっしゃっていたのは「音楽には真理がある」という事です。真理、真実というものが存在すること、それが音楽の中にも存在すること、その真理に対して誠実に演奏すること。楽譜というのは紙に音符が書いてあるに過ぎない。それをただ音にするのではなく、いかにそこから作曲家の表す音楽を読み取って生きた音楽に出来るかが大切なのだ、ということでした。これは私の演奏活動の最も重要な原点とも言える土台となっています。

ロンドンでニーマン先生に5年半就いた後パリに来ました。その後も年に一度ロンドンに通ってレッスンを受けましたが、この9年間にただ一度だけ、何の連絡もなくレッスンをキャンセルされたことがありました。ニーマン先生が病気だとわかった後、私は先生が元気になるまで待つと言ったのに無理してレッスンをして下さることになった 2003年1月6日、私はいつも通りユーロスターに乗ってロンドンへレッスンを受けに行きました。でも家には誰もいませんでした。パリに戻ってから分かったのですが、その2日前の1月4日に80歳でその生涯を閉じたのでした。

2005年2月